

「命よりお金」、私たちにも

雨宮処凛さん（作家・活動家）

朝日新聞 16(H28).8.26

（文中の太字は引用者によります。）

植松容疑者の行為は、期待通りの経済的な利益を生まない者は生きる価値がないという、この国の津々浦々にうつすらとはびこる価値観が露骨に表れた最悪の結末です。

介護や医療などの社会保障費は財源がないからと削減され、本来は長寿をことほぐべき高齢者が社会のお荷物のように扱われる。労働者は過労死寸前まで働かされ、企業の都合で使い捨て。リストラされた人は時に自殺に追い込まれ、生活保護費も切り下げられています。経済至上主義の中で、障害者だけでなく、そうでない人の命も常にお金とてんびんにかけられ、値踏みされているのです。

こうした価値観は1990年代後半以降、グローバル化に伴い国際競争が進むにつれて顕著になった。99年に障害者施設を訪ねた石原慎太郎東京都知事は「ああいう人ってのは人格あるのかね」と述べました。麻生太郎財務相は今年6月、高齢者の老後に言及して「いつまで生きてるつもりだよ」と発言。でも、この社会は本気で怒らなかった。

「かけがえのない命」と言われる一方、経済が人の命よりも優先される「命のダブルスタンダード（二重基準）」がまかり通ってきたのです。植松容疑者が犯行前、衆院議長あてに「日本国と世界のため」と書いたとされるのは、自身の行為の理解者がいると思ったのではないのでしょうか。

人の生存は本来、無条件に肯定されるのが大原則。2歳児は「年収いくら？」などと聞かないし、障害者を差別もしない。**他者があるがまま承認する価値観は生まれながら持っているのに、成長する過程で奪われていく。**今大切なのは、私たち一人ひとりが意図的に経済的な価値とは異なる視点に立ち返ることです。

自分の中にも弱い立場の人に対する差別の芽があると自覚し、極端な考えにつながらないよう自己チェックする。少し弱っていたり、生きづらさを感じている誰かへの優しいまなざしを忘れない。ふだんから命を大切にしている実践を積み重ねることしか、利益を創出する者だけに価値があるという暴力的な価値観にあらがえないと思うのです。

かつては私自身も年収で人を見るような人間でした。でも反貧困の運動を通して、障害のある人が「生きさせる」と叫んでいるのを見て、働けるかどうかと個人の存在価値は関係ないのだと、人間観が変わりました。

ある集会で出会った難病の女性の姿が忘れられません。車いすで眠っているように見えた女性は、わずかな筋肉の動きで介助者にこう伝えたのです。「まだ死んでない」。会場は笑いに包まれました。

荘厳な儀式のような豊かなコミュニケーションの作法。ここに生きていること自体の尊さ。こうした世界をご存じですか？（聞き手・森本美紀）

*

あまみやかりん 75年生まれ。貧困、非正規労働などの問題に取り組む。著書に「14歳からわかる生命倫理」など。